



Title	イギリス帝国における世界大戦の記憶とナショナリズムの比較研究
Author(s)	津田, 博司
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57858
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	津田博司
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23469号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	イギリス帝国における世界大戦の記憶とナショナリズムの比較研究
論文審査委員	(主査) 教授 藤川 隆男 (副査) 教授 秋田 茂 准教授 中野耕太郎

論文内容の要旨

本論文は、イギリス帝国における二つの世界大戦の記憶を分析することで、白人自治植民地において、植民地ナショナリズムおよび帝国への帰属意識がたどった変遷を解明しようとする研究である。第1次世界大戦後から1970年代までの、イギリス本国、カナダ、オーストラリアにおける戦争記念日の追悼活動が、具体的な検討対象となっている。本論文は、序論、本論（第1部、第2部、第3部からなる8章構成）、及び結論からなり、A4判で180頁、400字詰め原稿用紙に換算して約430枚に相当する。

論者は、序論において、帝国意識と戦争の記憶に関する従来の研究史を整理し、問題の所在を明らかにした後、本論を以下のように展開している。第1部「大戦間期における戦没者追悼と『記憶の空間』」では、第1章でイギリス本国での休戦記念日の成立過程を検証している。さらに第2章と第3章で、カナダにおける「休戦記念日」の成立とオーストラリアにおけるアンザック神話の形成を論じることで、戦没者追悼の様式が二つのドミニオンへ普及する過程を追い、第1次世界大戦の記憶と帝国規模の連帯意識の関わりを論じている。これに続く第2部「第2次世界大戦と『ブリティッシュネス』の拡散」では、まず第1章でイギリス本国の平和主義と宥和政策、戦後の「記憶の空間」の動揺を跡づけている。さらに第2章では、オーストラリアを扱い、第2次世界大戦中から戦後にかけての、アンザックの伝統の継続に着目し、帝国との関係の変化を具体的に検討している。また第3章では、カナダに関して、第2次世界大戦直後の国旗制定をめぐる議論を題材に、帝國的アイデンティティの存続と反イギリス的なナショナリズムの萌芽を示している。第3部「脱植民地化と『新しいナショナリズム』」は、第1章で、カナダにおける「大國旗論争」を通して、多文化主義化に伴う戦争の記憶の変容を概観し

ている。また、第2章では、ヴェトナム戦争期のオーストラリアを対象として、脱植民地化を志向する「新しいナショナリズム」の台頭を描き出した。最後に、結論にあたる「帝国の終焉と多文化主義化する戦争の記憶」では、1990年代以降の展開について分析した上で、本論文全体の議論を総括し、第1次世界大戦を契機として、イギリス帝国を横断する「記憶の空間」が成立し、イギリス帝国への帰属意識と両ドミニオンのナショナル・アイデンティティが調和的に共存していたこと、第2次世界大戦を経験しても、すぐにはその構造が変わることがなかったこと、多文化主義の時代にはいって、こうした戦争の記憶が旧白人植民地のナショナリズムによって、「横領」され、読み替えられていったことを主張している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス、オーストラリア、カナダにおける戦争の記憶と戦没者追悼の問題を、第1次世界大戦から1970年代かけて扱った、スケールの大きな研究であり、一次資料を基にした研究としては、日本のみならず、海外でもそのレベルに達する類似の研究が存在しない秀逸な研究である。オーストラリア、カナダ、イギリスにまたがる調査に基づくこうした研究は、イギリス帝国史研究者の範となるべきものである。第1部における帝國的な記憶の空間の成立の論証は、これまで日本において行われてきた「帝国意識」の研究が、抽象的な議論やテキストの断片的な分析、個別の事例研究にとどまっていたのに対し、戦没者追悼を通じて帝国意識がいかに帝国空間に拡散したかを論証しており、今後の「帝国意識」研究の礎石を置いたとさえ言えるように思われる水準に達している。第2部及び第3部については、アイデンティティの取り扱いをめぐって議論の余地はあるかもしれないが、第2次世界大戦後のオーストラリアのナショナル・アイデンティティと帝國的なアイデンティティの関係を実証的に明らかにしたという点で高く評価できる。また、カナダの国旗論争は、これまで日本では扱われることのなかったテーマであり、斬新な切り口による研究である。同様に「新しいナショナリズム」を論じる第3部第2章も、戦争の記憶とそれにまつわるシンボルが流用されていく状況を描いた斬新な着想に基づいた研究であるが、十分に説明が尽くされているとは言えないように思われる。ただし、論者の着想はきわめて独創的であり、今後の研究の進展にはおおいに期待できる。この他、脱植民地化の概念規定の問題、表象化された記憶とその背景となる権力構造の関係、アイルランド系やフランス系の動向に関するより詳細な検討、冷戦構造の解釈の問題など、本論文に関して疑問点や要望がないわけではないが、その多くは歴史観の違いによる異論や、今後の研究の発展に対する期待であり、本論文の意義をいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。